学位論文審査報告書

氏　　名　：　早島　慧
報告番号　：　甲188号
学位の種類　：　博士(文学)
論文題目　：　中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の研究
—『大乗荘厳経論』第VI章「真実品」を中心として—

I.　前言

早島慧氏が提出した学位請求論文『中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の研究—『大乗荘厳経論』第VI章「真実品」を中心として—』(B5版、本論252頁＋副論65頁、総317頁、400字詰600枚相当）は、大乗仏教における中心概念の一つである「二諦説」の思想史的展開を、その二大学派たる中観派と唯識派の相互交渉の過程のうちに捉えようとする研究である。唯識派（瑜伽行派とも称される）の基本典籍の一つである『大乗荘厳経論』第VI章「真実品」及び同論諸註釈の精緻な読解にもとづいて、その二諦説を考察することから出発し、中観・唯識両学派の諸文献を同論以前と以後に時代的に区分した上で、各文献に記述される二諦説を綿密に検討しつつ相互に比較対照することにより、説得力のある結論を導き出している。

二諦説はその重要性の故に斯学界において早くから注目されてきたテーマであり、個別的な研究も極めて多い。然し乍ら、部派仏教教理（アビダルマ）に見いだされるこの学説の端緒から、大乗仏教哲学における理論的洗練の極に至るまでの発展過程を広く射程に収めた通時的な研究であるという点で、早島氏の研究は類例のないものである。また、直接的な主題である二諦説の緻密な研究の遂行が、自ずから大乗仏教の形成と展開のプロセスそのものに新たな光を照射する営為となっていることも注目される。今回の氏の業績が今後のインド仏教思想研究の進展に寄与することは疑いを容れない。

II.　目次

序論
0.1 問題の所在
0.2 『大乗荘厳経論』「真実品」について
本論
1. 『大乗荘厳経論』「真実品」の研究
1.1 『大乗荘厳経論』「真実品」の構造
1.1.1 五種の advaya と勝義の特徴（k. 1）
1.1.2 無我説と修行道（kk. 2-5）
1.1.3 勝義・智慧と修行道（kk. 6-10）
1.1.4 小結
1.2 『大乗荘厳経論』「真実品」における二諦説
1.2.1 二諦説と勝義的智，勝義智

1.2.2 二諦説と菩薩道
1.2.3 小結
1.3 小結
2. 中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の変遷 —『大乗荘厳経論』「真実品」以前 —
2.1 初期中観派の二諦説
2.1.1 『根本中論頌』「観四諦品」における二諦説
2.1.2 『無畏論』・青目釈『中論』・『仏護注』における二諦説
2.1.3 小結
2.2 『菩薩地』「真実義品」における Pre-三性説的二諦説
2.2.1 『菩薩地』「真実義品」における二諦説
2.2.2『菩薩地』「真実義品」の真実と『大乗荘厳経論』「真実品」の勝義
2.2.3 小結
2.3 小結
3. 中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の変遷 —『大乗荘厳経論』「真実品」以降 —
3.1 『中辺分別論』における Post-三性説的二諦説
3.1.1 『中辺分別論』「真実品」における世俗諦と三性説
3.1.2 『中辺分別論』「真実品」における勝義諦と円成実性
3.1.3 小結
3.2 中期中観派の二諦説
3.2.1 『般若灯論』「観四諦品」における二諦説
3.2.2 『思択炎』「求真実智章」における二諦説
3.2.3 『入中論』「現前地品」における二諦説
3.2.4 小結
3.3 小結
4. 結論
Appendix
1. 『大乗荘厳経論』「真実品」 梵・蔵対照テキスト及び試訳
2. 『唯識三十論』における二種の転依
3. 複合語解釈からみた「勝義（paramārtha)」
4. 安慧・無性・清弁による『入楞伽経』第 X 章第 136 偈の引用

III. 論文の要旨

本論文は，インド大乗仏教の二大潮流といわれる中観派と瑜伽行派との関連性に注目し，２—７世紀のインド大乗仏教における思想史全体の再構築を主題とする．

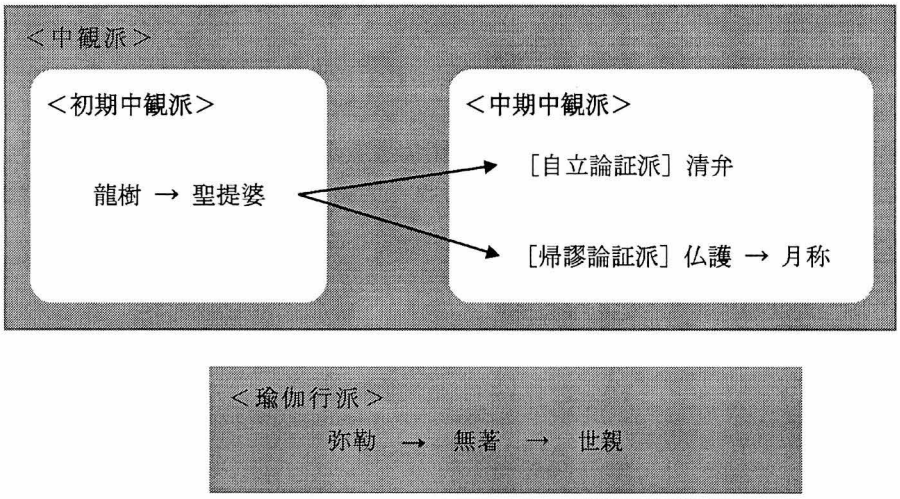
中観派と瑜伽行派は従来，相反する別系統の学派として理解されてきた．中国，チベットにおいて両派は相反する学派として伝承され，事実両派はインド大乗仏教の正統性をめぐる激しい論争を繰り広げてきた．従来の研究も両派が相反する学派であることを前提とした上で，両派の論争・相違点を中心に研究が積み重ねられている．

しかしながら，近年両派の関連性は見直され始めている．初期中観派と瑜伽行派の初期文献との共通点が注目され，両派を全くの別系統の学派と見なすのではなく，同一の宗教運動から発生した学派として見なす傾向になりつつあるのである．

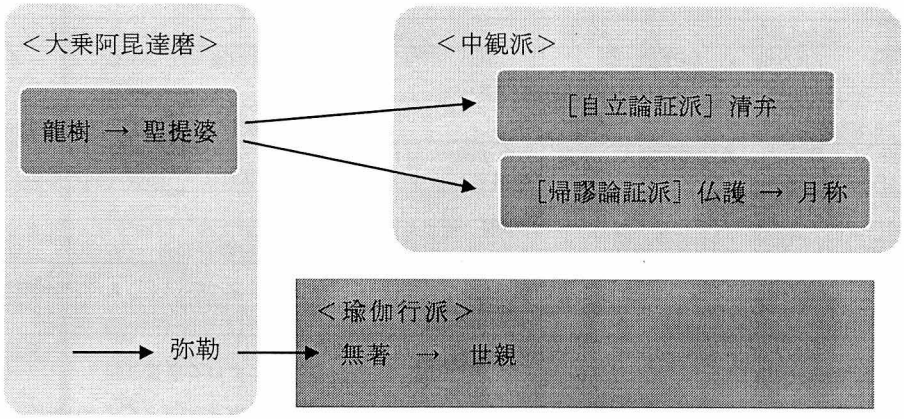
特に斎藤明氏は，龍樹（Nāgārjuna, ca. 150-250）を，中観派の祖師としてのみ理解するの

ではなく，中観・瑜伽行両派の成立以前に)，初期の八千頌系の＜般若経＞に基づいて，「大乗のアビダルマ（Mahāyānābhidharma, 大乗阿毘達磨)」を確立した最初期の論師として位置づけるのが相応しいと指摘する．これはつまり，中観派と瑜伽行派とが全くの別系統なのではなく，「大乗のアビダルマ」という同一の思想・宗教運動から起きたものとして，両派を捉える理解である．このような近年の理解と従来の理解は，次の様に図示される．

従来の理解



近年の理解



ただし，このような近年の学界の動向は，あくまでも両派の形成以前に注目したものであり，両派形成以降は，従来通り別系統の学派として理解されている．瑜伽行派成立以降の両派の関係については，中期中観派による瑜伽行派批判に代表される相違点ばかりが注目され，瑜伽行派，中期中観派の影響関係については，十分な研究がなされてきたとは言い難い状況にある．本稿は，両派に共通して重要な思想である二諦説の解釈の変遷に着目し，龍樹の二諦説から瑜伽行派の三性説へ，三性説成立以降の瑜伽行派の二諦説から中期中観派の二諦説へという一連の思想史展開を考察する．

第1章『大乗荘厳経論』「真実品」の研究

中観・瑜伽行両派の二諦説解釈の変遷において，『大乗荘厳経論（*Mahāyānasūtrālaṃkāra*

[-bhāṣya] : MSA[-Bh])』第 VI 章「真実品」の二諦説解釈は，一つの重要な転換点として位置づけられる．本章ではその二諦説の特徴を，MSA-VI の構造との関連から明らかにした．

MSA-VI は kk. 6-10 において瑜伽行派独自の修行道，五道が説かれており，従来の MSA-VI に関する研究は，この修道論に関するものが中心であった．これに対して本稿は，MSA-VI 全体の構造に注目し，MSA-VI は，まず[1]体得すべき勝義が説かれ（k. 1），[2]世俗のあり方にある衆生が，何故にその勝義を体得可能であるのかが説かれ（kk. 2-5），そして最後に，[3] その勝義を体得するためになすべき修行道，五道が説かれる構造であることを指摘した． この構造をふまえると，MSA-VI は勝義を主題として，その勝義が如何に体得されるかを三性説に基づいて説いた章であると理解される．

そして，MSA-VI における勝義は，「勝義を対象とする智もまた勝義である」という解釈によって， [i]対象としての勝義（真如・法界）と[ii]それを対象とする智（無分別智・勝義智）の二種であると考えられる．これは，MSA-VI が二諦説を三性説に基づいて解釈し，本来的に勝義ではない智を二次的な勝義として位置づけたものと理解される．従って，MSA-VI における二諦説は「世俗→勝義智→勝義」という階層的な二諦説と考えられるのである．なお本稿は，このような「二次的な勝義」を認める「分類された階層的二諦説」を，便宜上 Post-三性説的二諦説と名付けた．

第 2 章 中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の変遷—『大乗荘厳経論』「真実品」以前 —

第 2 章では，MSA-VI 以前の中観・瑜伽行派の文献を考察し，MSA-VI に確認された Post-三性説的二諦説の特徴が，MSA-VI 以前の文献においては確認されないことを指摘した．

龍樹造『根本中論頌』をはじめとする，初期中観派の主要文献において世俗，勝義は両者ともに分類されることはなく，「二次的な勝義」も認められず，「二次的な勝義」も「階層性」もこれらの文献には確認されない．

そして，MSA-VI 以前，三性説成立以前の瑜伽行派の文献として『菩薩地（*Bodhisattva-bhūmi* : BBh)』第 IV 章「真実義品」における二諦説を考察し，BBh-IV には Post-三性説的二諦説の特徴が確認されないことを指摘した．BBh-IV には，初期中観派において重視された二諦説が意識されながらも，そこに中観派が否定する仮説の所依を認める独自の二諦説が説かれる．このような仮説の所依を認める二諦説は後の三性説形成に関連する二諦説であり，本稿ではこれを Post-三性説的二諦説と区別して，「Pre-三性説的二諦説」と便宜的に命名した．

BBh-IV は，初期中観派における主要術語を発展的に解釈したものである．そして，そこに説かれた思想が MSA-VI において，さらに発展するものと考えられる．二諦説に関しても，中観派の二諦説を前提として Pre-三性説的二諦説を導入し，それが後の三性説形成へと発展するのであり，一連の思想史的文脈として二諦説から三性説への思想発展が位置づけられる．

第 3 章 中観・瑜伽行両派における二諦説解釈の変遷—『大乗荘厳経論』「真実品」以降 —

そして最後に，MSA-VI 以降の文献における二諦説を考察した． MSA-VI にみられた Post-三性説的二諦説は，『中辺分別論（*Madhyāntavibhāga[-bhāṣya]* : MAV[Bh])』において発展的に受けつがれ，それが中期中観派の二諦説解釈へと影響することを明らかにした．

MAV-III は二諦説を根本真実たる，三性説に基づき解釈し，それぞれ三種であると説く．MAV-III は本来的に勝義である真如のみならず，涅槃・道を勝義と説く．これは「二次的な勝義」を認める二諦説と考えられるが，MAV-III のみならず，本来的に世俗諦でないもの

を設定し，世俗についても分類された階層的な構造と理解している．これはMSA-VIにみられたPost-三性説的二諦説を発展的に継承したものと理解される．

そして，中期中観派の文献にはそれ以前の中観派の文献には確認されない，「二次的な勝義」，「分類された階層的な二諦説」が確認される．これは中期中観派にPost-三性説的二諦説が影響を及ぼしたことを意味すると考えられる．清弁の『般若灯論』第XXIV章，そして『思択炎』第III章には，本来的に勝義ではない智慧を勝義とする「二次的な勝義」が確認される．これは「分類された階層的な二諦説」であり，Post-三性説的二諦説の影響を受けたものと考えられる．さらに，月称の『入中論』第VI章には「二次的な勝義」は認められないものの，世俗に「世間からして虚偽」と「唯世俗」という，「本来的には世俗諦ではないもの」を二諦説の構造に導入する「分類された階層的二諦説」が確認される．これは月称以前の中観派の二諦説解釈には確認されないものであり，直接的な関連は裏付けられないものの，Post-三性説的二諦説からの影響であると推測される．つまり，中期中観派は瑜伽行派の三性説を批判する一方で，瑜伽行派のPost-三性説的二諦説の影響を受けて二諦説を解釈したと考えられる．

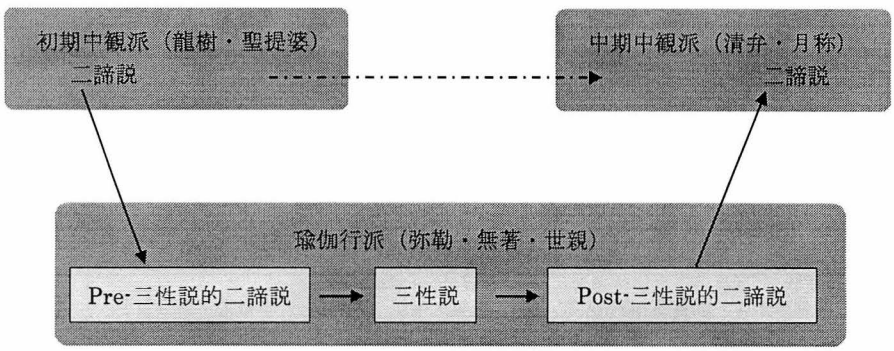
結論

以上の考察から，二諦説が中観・瑜伽行両派の思想史をつなぎとめる役割を果たした点が確認され，その転換点にはMSA-VIにおける二諦説が位置付けられる点が導き出された．

初期中観派が重要視した二諦説は，BBh-IV において仮説の所依を認める二諦説（Post-三性説的二諦説）として受けつがれ，それが後の三性説の形成に関与する．そして，三性説成立以降に瑜伽行派は，自派の根本真実である三性説に基づき，智慧・菩薩道との関連から「二次的な勝義」を認める「分類された階層的な二諦説」として二諦説を解釈する．中期中観派は瑜伽行派を激しく批判する一方で，その瑜伽行派の二諦説解釈の影響を受けて二諦説を解釈するのである．

つまり，少なくとも二諦説の解釈に限定すれば，両派は相反する学派である一方で，連続した思想史的文脈のなかに位置づけられるべきである．本稿の結論は次のように図示される．

本稿の結論



IV. 審査委員会の評価

二諦説に関する個別研究は数多く蓄積されてきたが、本研究がそれらを踏まえて更に精

緻な分析を試み、その結果を総合した上で、大乗二学派の相互交渉というパラダイムのもとに俯瞰し、一定のパースペクティブを与えた点は大きな寄与である。また、更に遡って二諦説の部派的背景（特に説一切有部説）をも視野に入れ、従来指摘されていた存在論的二諦（勝義有・世俗有）とは異なる、謂わば解釈学的二諦（了義と未了義の二諦、いわゆる「教の二諦」）の文脈で、龍樹の『中論』XXIV. 8-10 に示される著名な二諦偈を読み解こうとする点は特に優れた着眼である。中論本偈を初めとする龍樹著作を、彼の時代と状況という本来の文脈において理解する contextual study に道を開くものと言える。そして後代にみられる、勝義を「修行道」とする理解の淵源に、『大毘婆娑論』の理解が措定されるとの指摘は極めて妥当と考えられる。なお、当該の『大毘婆娑論』の記述には、凡夫位と聖者位が各々世俗と勝義とに配当されている点にも注意すべきであり、これはアビダルマの二諦説と龍樹のそれとの関連を再考する材料となる。

『大乗荘厳経論』(MSA) 第 VI 章「真実（Tattva）」の有機的な内的構造が、三性説及び二諦説という理論面と、菩薩道すなわち唯識五道（若しくはその初期形態）という実践面の両面から解明された点は、同論研究史における里程標の一つとなろう。更にそこから、その二諦説における勝義が対象（真如、法界清浄）と智（無分別智）の二面で説かれること、そこに自ずと水準（次元）の相異があること、それが実践主体の機根もしくは修道のプロセスと関わっていること、といった決定的な観点が提示され、そこにこそ以後の中観派における二諦説への決定的な影響を見るべきであるという指摘、いずれも研究に新たな地平を拓いたものであると評価される。これに関連して、同論の不二（advaya）に関する議論を二種否定の観点から整理した点も、先行研究の総合的活用という意味で評価に値する。

他方で、審査委員からは幾つかの問題点が指摘され、要望も示された。

先ず、本研究全体に関しては、MSA, VI に対する二種の複註のテキストと和訳を副論として付せば更に充実したものとなったであろうこと、また、MSA, VI の内的構造は十分に解明されたが、MSA 全体における同章の位置づけ、或いは本論構成との連関をも示すべきであった、との指摘がなされた。また個別的な論旨に関しては以下のような重要かつ有益なコメントが提示された。

1）早島氏の提示する資料によれば、MSA, VI.1 に、不二（advaya）なることが勝義（paramārtha）として説かれ、VI. 6-9 および VI. 10 の世親釈（MSABh）に、無分別智と勝義が関係づけられ、無分別智が勝義を知る智（paramārthika-jñāna あるいは paramārtha-prajñā）として説かれたことが知られる。MSA の註釈文献において勝義の語義解釈を説くのは、安慧の SAVBh である。ただし勝義を無分別智とする文言はあるが、有財釈（bahuvrīhi）の解釈は示されず、語義解釈によって無分別智が勝義であることを根拠付けているわけではない。また他の瑜伽行派の論書では、MAVBh, III. 10 に勝義の語義解釈が見られるけれども、その bahuvrīhi 解釈には「道（mārga）」をあげるのみである。一方、中期中観派に属する清弁の二諦説については、（1）勝義（paramārtha）に語義解釈を与えたこと、（2）その bahuvrīhi 解釈によって無分別智が勝義であることを根拠付けていることが特徴として知られる（PPr, XXIV）。以上のことから、確かに語義解釈では瑜伽行派が先行するけれども、無分別智が勝義であると明言したのは、瑜伽行派においては安慧が最初であり、総合的に判断して、安慧に中観派の清弁が先行する可能性も残る。唯識派の無性と安慧、中観派の清弁という三論師の相互関係や年代論にはまだまだ検討の余地があるであろう。

また、MSA, VI における法界の不二（advaya）という勝義については、チベット訳の解

釈にもとづいて、清弁が強く意図した非定立的否定と定立的否定という空性を表現する否定の観念をもちこんで解釈したために、法界すなわち勝義とし空性の観念を不二なる存在として定立しようとする瑜伽行派の不二の解釈が論じ尽くされていない憾みがある。

どちらも、研究対象の原典を後の註釈文献やチベット訳に頼って解釈しようとしたことに起因する問題点である。原典と註釈、原典とチベット訳との解釈にズレがある場合もあることを意識する必要があり、今後も注意しなければならない点であろう。

2）本研究が優れた業績であることは言うまでもないが、中には作業仮説の域を出ない箇所もあるため、今後は各部分を補強もしくは修正することによって、考察を一層深めていくことが望まれる。特に下記の点について補強を施すならば、全体の論証がより強固なものとなると期待される。

MSA, VI には、法界が勝義であることは明記されるが、それを直観する無分別知が勝義とみなされる点は、文言としては明記されない。文献に記されることと、関連情報を総合して得られる仮説としての解釈との間に、はっきりと境界線を示すことがまず必要となる。したがって『大乗荘厳経論』が無分別知を勝義とする理解は仮説（または解釈）の範疇に入る。その仮説自体は、妥当なものと考えられるが、若干の補充調査が必要となる。すなわち無性と安慧の注釈や清弁の言明などとは別個に、『大乗荘厳経論』内部の思想との整合性からみたときに、その仮説が成り立ちうるかを検証してみる必要性がある。たとえば、所取・能取が不二となる入無相方便を前提とすれば、対象たる法界と主体たる無分別知もまた不二となるため、双方が必然的に勝義となる点が導き出される。その場合、対象たる真実とそれを知る無分別知は不二であるという、より普遍的な前提が、どの程度まで通底していたのかを詳らかにする必要も付随して生じるだろう。

次に、瑜伽行派が三性説を交えて二諦説を、「三性説的二諦説」なるものに展開させ、それがさらに中期中観派（清弁・月称）の階層的二諦説へと展開してゆく点の指摘は、斬新であり注目に値する。その一方で、中期中観派は、熾烈な瑜伽行派批判を展開している点も、早島氏の指摘する通りである。そこにおいて問題となるのが、三性説によって変容した二諦説を、中期中観派が受容した一方で、三性説そのものは排斥した点である。中期中観派が「三性説的二諦説」の何を受け取り、何を排除したのかという点についての、より具体的な議論を深めていく必要がある。その課題は、たとえば清弁と月称の唯識批判（『入中論』VI.78-79 偈周辺など）を分析することなどによって果たされる可能性がある。

上述の指摘並びに要望は、いずれも本研究論文が優れた学術的価値を有することを前提として提示されたものであり、審査委員会が著者早島氏の更なる研鑽に期待し研究の進展を確信していることの証左である。

以上、審査の結果、本審査委員会は、早島・氏が龍谷大学学位規程第 3 条第 3 項に基づき、博士(文学)の学位を授与される十分な資格を有するものと認めるものである。

2014(平成 26)年 6 月 30 日

主　査：若原　雄昭
副　査：能仁　正顕
副　査：加納　和雄